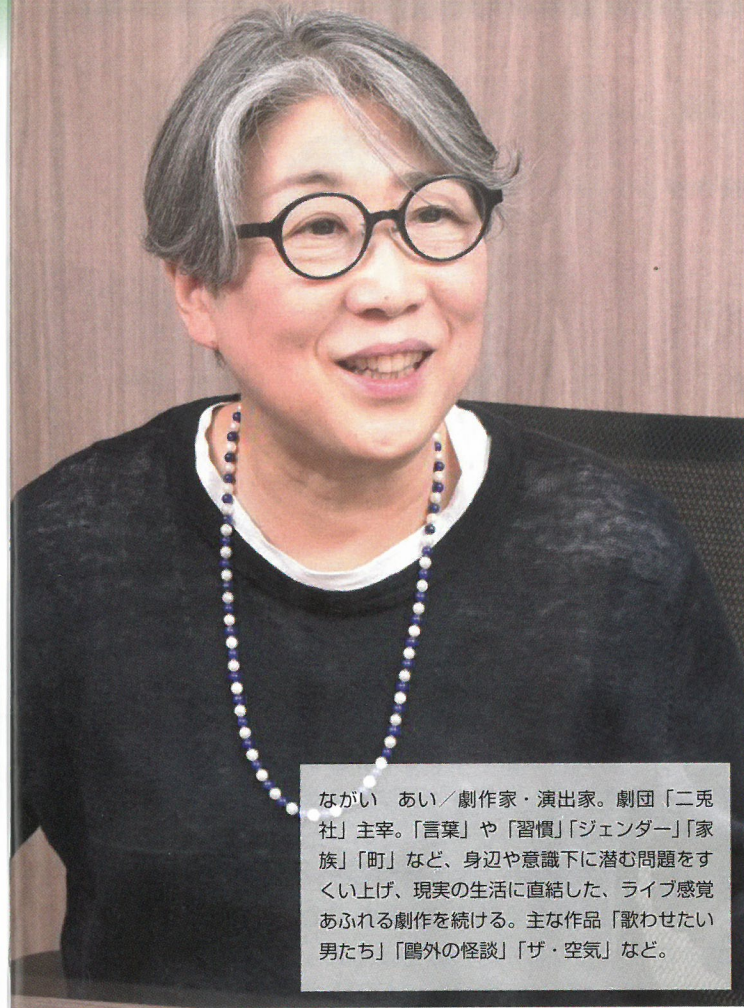


伝えること、 生きること

永井 愛さん



ながい あい / 劇作家・演出家。劇団「二兎社」主宰。「言葉」や「習慣」「ジェンダー」「家族」「町」など、身近や意識下に潜む問題をすくい上げ、現実の生活に直結した、ライブ感覚あふれる劇作を続ける。主な作品「歌わせたい男たち」「鷗外の怪談」「ザ・空気」など。

● 演劇「歌わせたい男たち」

2005年に都立高校を舞台にした「君が代」斉唱問題をめぐる喜劇「歌わせたい男たち」を上演しました。国旗国歌法ができたのが1999年、その後2003年に東京都教育委員会が卒業・入学式などで「日の丸・君が代」を強制する通達を出します。壇上の国旗に向かうように「児童生徒の席は正面を向いて座るよう設営する」など細かな指針通りの式を求め、教育現場への管理が強まります。それまでは卒業生と在校生が向かい合い対面で呼びかけあうなど自由な形で式がされていましたが、通達以来でなくなってしまうました。台本を書いた当時は、国歌斉唱時に不起立の教員がいると連帯責任で学校の教員全員が研修を受けなければいけないこともありました。

当時、新聞のアンケートでこの問題はどう思うかとの問いに「よくない」と答える一般の人も多かったのですが、直接の問題ではないからと傍観的な存在になっっていく。多くの人がよくないと自覚したけれど、声をあげなかったのです。

ちょうど、ロンドンの劇場から、何か上演しないかと声がかかっていました。その芸術監督さんには「どこの国の話でも本当にあることであれば、世界的に通用する」と言われていたので、「歌わせたい男たち」の企画書を送ったら、「何年前の話ですか？」と聞かれました。「今です」と伝えたら「これは理解されないだろう」と。ロンドン市民が一番理解できないのは、「周りの当事者でない人たちが黙っていることだ。当事者じゃない保護者や先生たち、自分は『君が代』を歌うという人も、強制することにはおかしいと声をあげるのがふつうの民主主義社会だ」と言われました。ここに、日本のむずかしさがありますよね。認識がないから認識を変えればいいのですが、認識はしているけれど、動かない・声を出さないことがふつうになってしまっている。

● ものごとも見抜く目

この芝居では、最後に校長が大演説する場面があります。ここで「内心の自由」という話が出てきます。国歌の強制は内心の自由を侵害するものではないと

第4回・ふつうの民主主義

言うわけです。「内心の自由は、外に出したら外心だ」「外心の自由は保障されていない」と。初演の時にはお客さんは笑ったんですよ。ところが3年後に再演した時には、客席がシーンとなった。アンケートを読むと「校長の演説を聴いて初めて内心の自由という意味がわかった」と演説の内容が作者の言いたいことだと思っただ人がいて驚きました。校長の演説は、教育委員会から文句を言われないうために必死で国歌斉唱をさせようとする中間管理職の妄言です。そんな人間の哀しい姿として見ても良かったのですが、そう受け取らない人が増えた。

言ってみればリテラシーですよ。意図を見抜く目のようなものですが、作者が長々と書いたところがすべて作者の訴えたいことだという無批判の見方についてのまにか変わってしまった。それが最近気になることです。考えないだけではなく、説明されたものをそのまま鵜呑みにすることが多くなっていたり、なかなか難しいところは解釈を与えてあげるようなやり方になっている。それも一つの思考能力の衰退かなと思っています。

